

茨城県結城市

柳下C遺跡

宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2016

結城市教育委員会
有限会社毛野考古学研究所

茨城県結城市

柳下C遺跡

宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2016

結城市教育委員会
有限会社毛野考古学研究所



1号住居跡全景（東から）



1号住居跡炭化材・焼土出土状況（南東から、左上は炭化材を覆う焼土の様子）

例　　言

1. 本書は、宅地造成工事に伴う柳下C遺跡（遺跡番号08207027）の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 「柳下C遺跡」は、茨城県結城市大字結城字柳下12093番6に所在する。
3. 発掘及び整理調査の期間・発掘調査の面積は次のとおりである。
【発掘調査期間】 平成28年7月4日～平成28年7月8日
【整理調査期間】 平成28年7月9日～平成28年12月27日
【発掘調査面積】 100m²
4. 発掘及び整理調査は、原作者（個人）と有限会社毛野考古学研究所茨城支所による委託契約を締結し、結城市教育委員会の指導のもと、委託を受けた有限会社毛野考古学研究所茨城支所が実施した。
5. 発掘及び整理調査にかかる経費は原作者（個人）の負担による。
6. 発掘及び整理調査は、常深尚（有限会社毛野考古学研究所）が担当した。
7. 本書の編集・執筆については、齊藤達也（結城市教育委員会生涯学習課文化係）・常深が協議して行い、第1章を齊藤、その他を常深が執筆した。
8. 遺構及び遺物の写真は常深が撮影し、空中写真は小出拓磨（有限会社毛野考古学研究所）が撮影した。
9. 調査資料は、一括して結城市教育委員会で保管している。
10. 発掘調査の実施から報告書の刊行に至る過程で下記の諸氏・機関にご協力賜った。記して感謝申し上げる次第である（敬称略、順不同）。

川又重二　閑清　鶴見貞雄　鈴木測量設計

凡　　例

1. 方位は真北、水平水準は海拔高である。
2. 公共座標は平面直角座標、世界測地系を使用し、南北をX軸、東西をY軸とした。
3. 本所で使用した遺構略号はS I：竪穴住居跡、P：ピットである。
4. 土層・遺物の色調は『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄著　財日本色彩研究所）を使用した。
5. 遺構図中の塗り表現は次のとおりである。 ■ カマド粘土 ■ 塗化物 ■ 地土

目　　次

卷頭図版・例言・凡例・目次

第1章　調査に至る経緯	1	第4章　遺構と遺物	5
第2章　遺跡の立地と歴史的環境	2	第1節　調査の概要	5
第1節　地理的環境	2	第2節　竪穴住居跡	5
第2節　歴史的環境	2	第5章　調査成果	10
第3章　調査の方法と経過	4	写真図版・抄録・奥付	
第1節　調査の方法	4		
第2節　調査の経過	4		

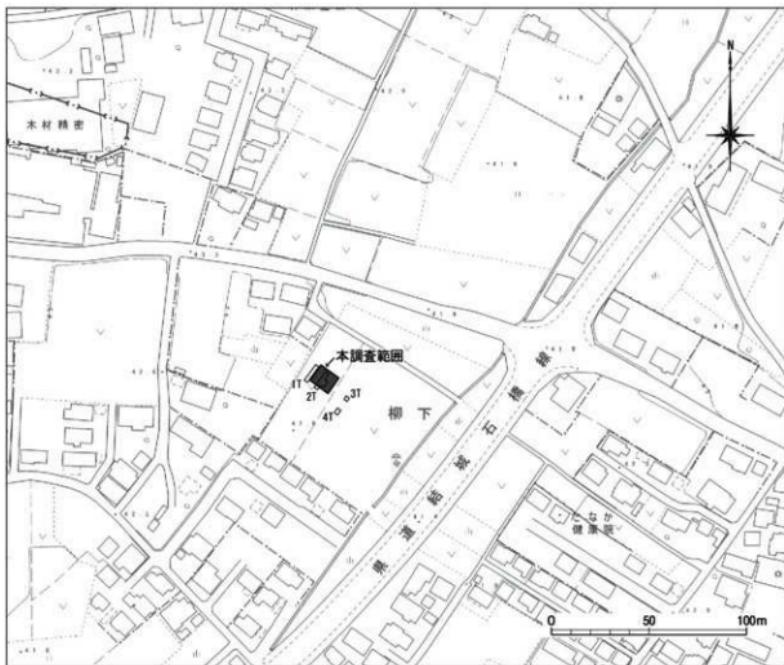
第1章 調査に至る経緯

柳下C遺跡（遺跡番号08207027）は、田川と西仁連川（江川）に挟まれた台地上に立地し、結城市大字結城字柳下地内の東西約220m、南北約260mの範囲に広がる、古墳時代の包蔵地として周知している。

今回の調査地点は、集合住宅の建設を目的に、原因者（個人）より結城市教育委員会生涯学習課に対し、計画地内の埋蔵文化財包蔵地に関する照会があった。当地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である柳下C遺跡に該当しているため、工事に際しては協議が必要である旨を回答した。

平成28年5月12日に計画地内においてトレチ調査による試掘調査を実施した。調査の結果、計画地内の北部で堅穴住居跡が1軒存在することが確認され、埋蔵文化財の所在が明らかとなった。その後、試掘調査の結果をもとに埋蔵文化財の取り扱いについて、原因者（個人）と文化財保護の立場から協議を重ねた結果、現状保存が困難との結論に達し、発掘調査による記録保存の処置を講ずることとなった。

発掘調査は、原因者（個人）と有限会社毛野考古学研究所茨城支所との間で発掘調査の契約を締結し、結城市教育委員会生涯学習課の指導のもと、平成28年7月4日から平成28年7月8日の5日間にわたり、調査を実施した。調査区は、遺構が確認された周囲100mを対象とした。



第1図 調査区域図（結城市発行『結城市都市計画基本図』1/2500）

第2章 遺跡の立地と歴史的環境

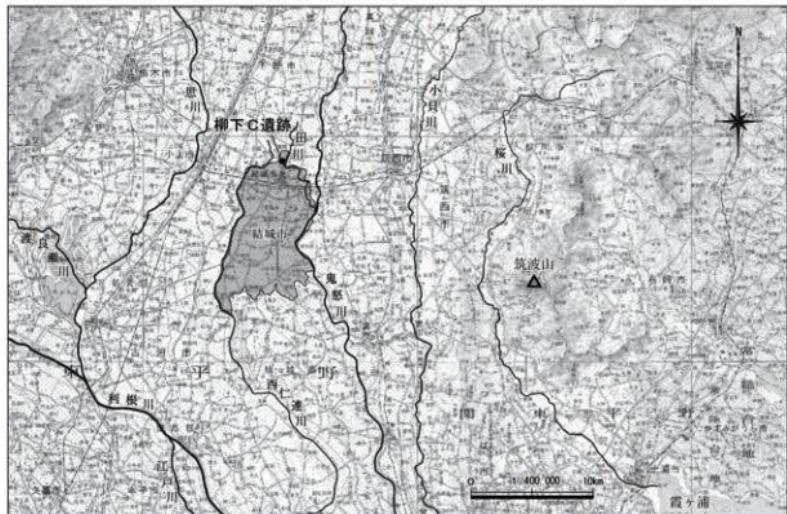
第1節 地理的環境

結城市北部に位置する柳下C遺跡は、鬼怒川の支流である田川と、利根川の支流である思川に挟まれた台地（結城台地・小山台地）にある。この台地は、栃木県央部から茨城県西部の南北に延び、中央を西仁連川が流れる。台地の東側には鬼怒川低地が、西側には思川低地が広がる。台地上には樹枝状の浸食谷が発達しており、本遺跡も深い谷に面した緩斜面に位置している。標高は41mほどである。台地には黒ボク土が発達し、その下に関東ローム層が堆積する。関東ローム層は、約50cmの田原ローム層と鹿沼軽石層を挟む厚さ約2mの宝木ローム層からなり、下部は粘土層・砂礫層に移行するとされる。

第2節 歴史的環境

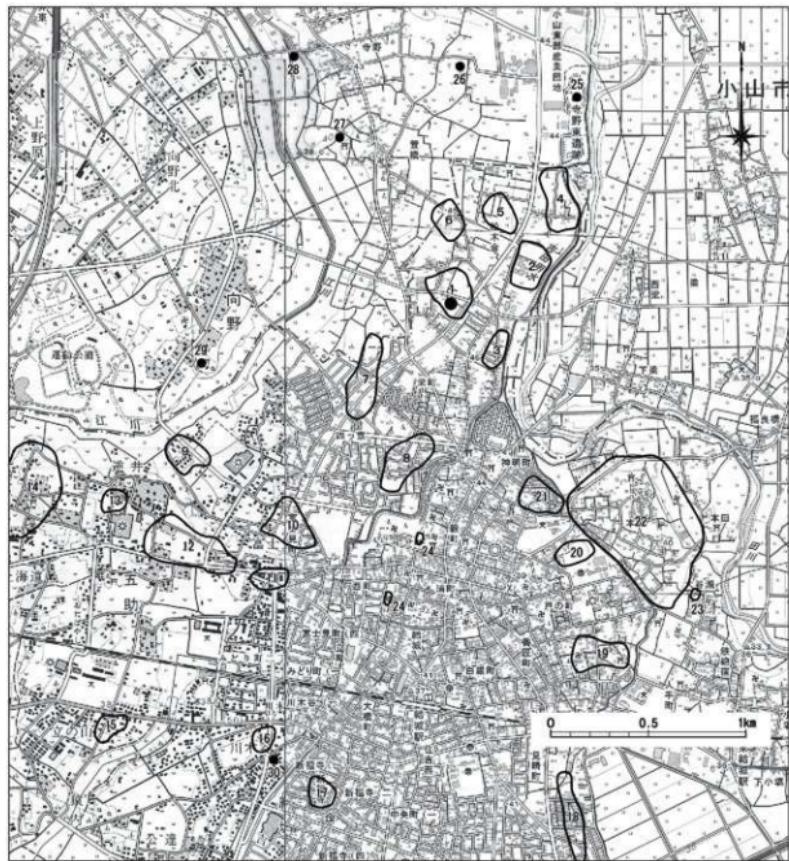
縄文時代は中期から後期前半までの遺跡が多く、松木合遺跡（4）は晩期まで継続する。寺野東遺跡（25）では、後期初頭の水場遺構、後期前半から晩期中葉にかけての集落内に環状盛土遺構が確認された。

古墳時代は、中期から後期にかけて結城台地の東縁部の田川沿いに古墳群が分布し、小山市側の梁古墳群・寺野東古墳群、結城市側の松木合古墳群（4）が知られる。寺野東遺跡（25）では、古墳時代前期の大規模な集落跡が調査され、方形周溝墓・古墳・土坑墓などの墳墓も多数見つかった。さらに南方の曾我殿台遺跡（19）でも前方後円墳2基を含む古墳群が知られる。



第2図 柳下C遺跡位置図（国土地理院発行『宇都宮』・『水戸』1/200,000を50%縮小）

奈良・平安時代には本遺跡を含む結城市は下総国結城郡に帰属したとされ、下野国・常陸国との国境となっていた。結城郡の中心である結城郷は本遺跡より南方約3kmに位置し、49棟の掘立柱建物跡や白磁・三彩・綠釉陶器を検出した峯崎遺跡、227軒の堅穴住居跡や灰軸・綠釉陶器を検出した下り松遺跡があり、一部で官衙跡との推定がなされている。さらに南方約3km付近には結城廃寺があり、奈良時代創建の金堂跡・塔跡・講堂跡・中門跡が検出され、堆積・塑像・種先瓦などが出土している。このほか寺野東遺跡(25)では、多数の住居跡に加え、方形周溝造構、台地を大きく横断する大溝、蓋付きの蔵骨器なども検出された。本遺跡の南西約10kmにある小山市金山遺跡では9世紀中葉の鍛冶遺構、小山市大境遺跡では9世紀後半の製錬滓が出土し、周辺に製鉄遺跡の広がりが想定されている。



第3図 柳下C遺跡周辺の遺跡分布（国土地理院発行『下館』・『小山』・『久下田』・『小金井』1/25,000）

第1表 周辺の遺跡一覧表

No.	遺跡名	主な時代・遺構	主な文献	No.	遺跡名	主な時代・遺構	主な文献
1	柳下C遺跡	集落跡(平安時代・佐賀県・古墳時代)	本報告	16	公講遺跡	佐賀地(中世)	
2	柳下A遺跡	佐賀地(歴史・古墳・奈良・平安時代)		17	猪俣遺跡	佐賀地(奈良・平安時代・中世)	
3	柳下B遺跡	佐賀地(奈良・平安時代)		18	穂賀台遺跡	佐賀地(繩文時代)	
4	松木合人遺跡	佐賀地(歴史・佐生・古墳時代)・古墳		19	豊後鞍台遺跡	佐賀地(歴史・古墳・奈良・平安時代)・古墳	
5	松木合日遺跡	佐賀地(古墳時代)		20	風原屋遺跡	佐賀地(歴史時代)	
6	松木合山遺跡	佐賀地(古墳時代)		21	永正塙跡	佐賀地(繩文時代・中世)	
7	砂宿A遺跡	佐賀地(奈良・平安時代)		22	姑城跡	城跡(奈良・平安時代・中世・近世)	
8	根木瀬遺跡	佐賀地(奈良・平安時代)		23	恩賜御結城家御廟	墓地(中世・結城東照宮代城主別代・18代)	
9	四ツ高遺跡	佐賀地(中世)		24	御井田城	城(中世・近世)	
10	道井遺跡	佐賀地(奈良・平安時代・中世)		25	寺野東遺跡	佐賀地(歴史時代・奈良・平安時代)・古墳	佐木昌典文庫叢書13
11	五本木遺跡	佐賀地(中世)		26	寺野西遺跡	佐賀地(歴史時代)	
12	長尾廻道跡	佐賀地(奈良・平安時代・中世)		27	西・台遺跡	佐賀地(旧石器)	
13	長尾西遺跡	佐賀地(奈良・平安時代・中世)		28	御井上野原A遺跡		
14	上ノ宮遺跡	佐賀地(奈良・平安時代・中世)		29	星の宮神社前遺跡		
15	立の山遺跡	佐賀地(奈良・平安時代)		30	知内保吉塚	指定25m四方の方墳	

第3章 調査の方法と経過

第1節 調査の方法

表土掘削は重機を使用し、黒色土（Ⅲ層）上面まで掘削した。Ⅲ層上面で遺構検出を行い、堅穴住居跡1軒を確認した。調査区北隅と南隅にはローム層（V層）までの基本層序を確認するトレーニングを設定し、調査区北東壁沿いには黒色土中の遺物の有無を調べるためのトレーニングを入れた。

遺構の測量は、断面図を手実測（縮尺1/20）、平面図を電子平板で行った。平面図中の等高線は10cm間隔とした。遺構の写真撮影は、35mmモノクロ・カラーリバーサルのフィルムカメラとデジタルカメラを併用した。遺跡全景の空中写真はドローン（DJI社 Phantom 2 Vision+）を使用して撮影した。

遺物注記は注記スタンプを使用して行い、「7MYSC SI01 No 1」のように注記した。遺物の写真撮影はデジタルカメラ（Nikon D7000）を使用した（JPEG、RAW）。遺構図・遺物実測図・報告書作成とともにAdobe® Creative Suite®でデジタルトレース・編集等を実施し、印刷所にはPDF型式（X-1a;2001）で入稿した。

第2節 調査の経過

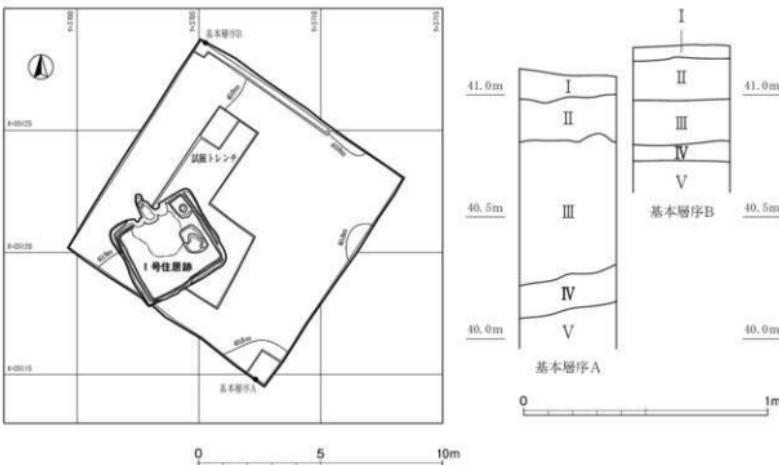
- 【7月】 4日：表土の重機掘削を行う。仮設トイレ・器材等を搬入。堅穴住居跡1軒を検出する。5日：基準点測量。1号住居跡の掘削を開始する。6日：1号住居跡の掘削を継続し、断面測量、炭化材の平面測量を取り上げを行う。7日：1号住居跡カマドの掘削を行う。調査区全景の空中写真撮影を行う。遺構平面測量。8日：1号住居跡の掘り方調査。市教委による現地調査終了確認を受け、器材を撤収する。
- 【8月】 出土遺物の洗浄・注記・接合・写真撮影、遺構写真整理・遺構図編集を行う。
- 【9月】 出土遺物の実測・トレース、遺構・遺物の写真図版作成を行う。
- 【10・11月】 発掘調査報告書の原稿執筆・編集を行う。
- 【12月】 発掘調査報告書の校正・印刷・製本・図面・写真・遺物の納品準備を行う。

第4章 遺構と遺物

第1節 調査の概要

遺跡の基本層序はⅠ層（現代の畑耕作土）、Ⅱ層（灰褐色土、旧耕作土）、Ⅲ層（黒色土）、Ⅳ層（ローム漸移層）、V層（ローム層）である（第4図）。調査区周辺は南東に想定される谷地形に向かって下る斜面地にあり、Ⅲ層は南東側ほど堆積が厚くなる。なお、Ⅲ層からの出土遺物は皆無であった。

Ⅲ層上面で検出された遺構は、事前の試掘調査で確認されていた竪穴住居跡1軒（1号住居跡）のみであった。1号住居跡は北西壁にカマドを構築する平安時代の住居であり、覆土中に炭化材と焼土塊が多く含まれることから、焼失住居と考えられる。

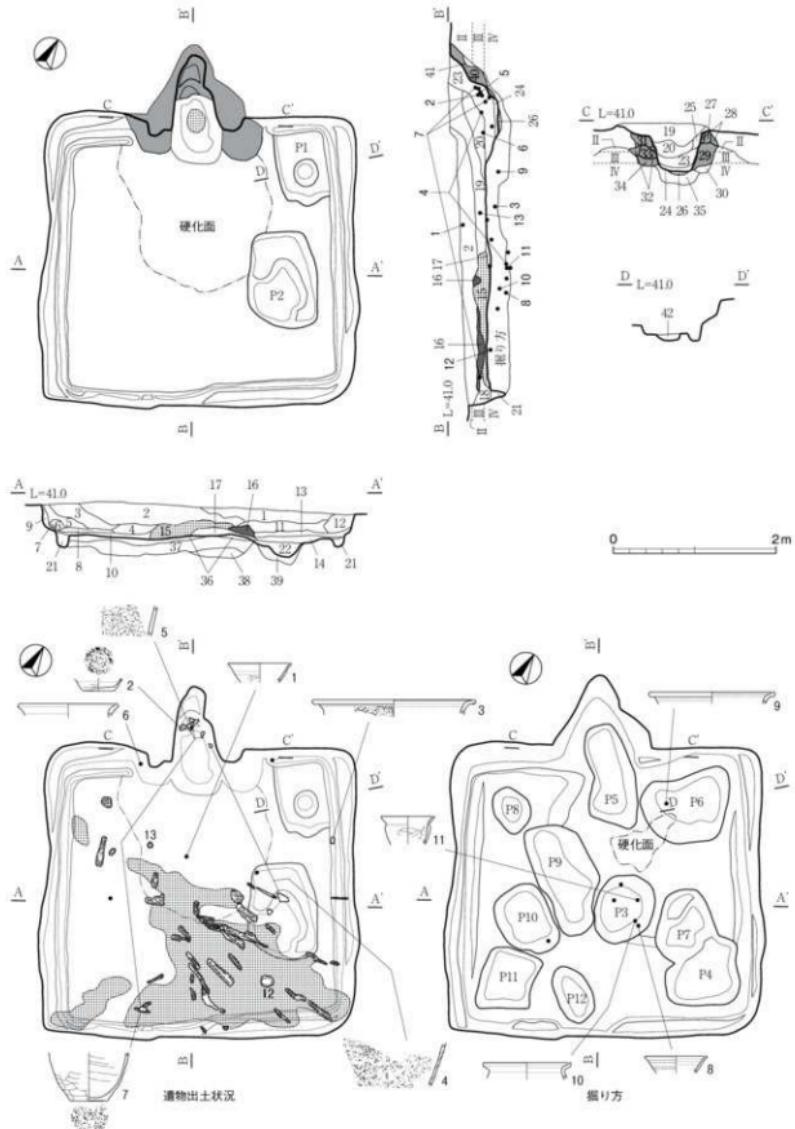


第4図 柳下C遺跡全体図(1/200) 及び標準堆積土層(1/20)

第2節 竪穴住居跡

1号住居跡（第5～7図、P.L. 1～3）

形状・規模 東西3.95m、南北3.60mの規模で、やや東西が長い隅丸の方形を呈する。カマド付近の検出面から床面までの深さは43.5cmである。**床面** カマド前から住居中央部にかけて硬化面が確認され、平坦である。それ以外の部分はやや低くなり、多少の凹凸がみられる。**壁周溝** カマド部分を除いて検出されたが、南東壁沿いの西寄りで浅くなり、その東側では折れ曲がる箇所がある。壁周溝は上幅10～20cm、下幅5～10cm、深さ5～20cmである。**貯蔵穴** カマド右脇の住居北東隅にあるP1が貯蔵穴とみられる。P1は南東辺にやや凹凸があるが、概ね80×60cmの長方形で深さ6cmの浅い掘り込みがあり、その中央南寄りに径30cmで深さ27cmの円形ピットを



第5図 1号住居跡平面図・断面図

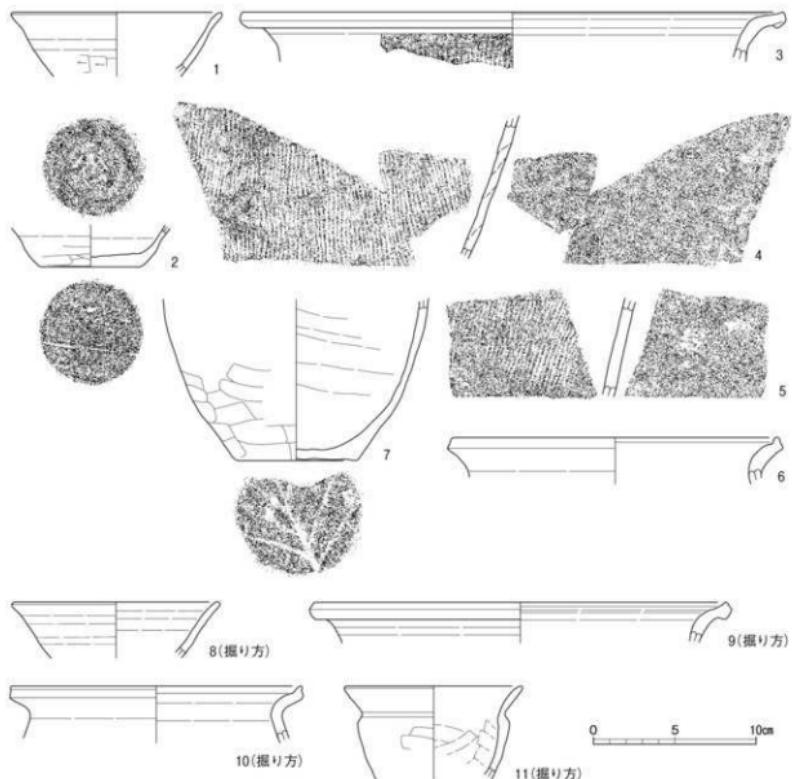
1 号住跡土層

1 黒色土	ローム粒少量	23 灰褐色土(粘土主張) 織りなし、焼土粒多量
2 黑褐色土	ロームブロック (φ5cm以下) 中量、ローム粒多量、炭化物少量	24 黑褐色 土(粘土主張)
3 黑色土	ロームブロック (φ3cm以下) 少量、ローム粒少量	25 黑褐色土 土(粘土主張) 多量
4 黑色土	焼土粒、炭化物少量	26 烧土粒
5 黑色土	ローム粒微量	27 黑褐色土 灰褐色粘土ブロック (φ2cm) 少量
6 黑色土	焼土粒多量、炭化物少量	28 黑褐色土 灰褐色粘土ブロック (φ3cm以下) 多量
7 黑色土ブロック		29 黑褐色粘土 烧土粒、灰褐色・ローム粒少量
8 黑色土	焼土粒微量	30 黑褐色土 烧土粒、ローム粒微量
9 黑色土	焼土粒、灰褐色少量	31 灰褐色粘土 烧土粒・ローム粒多量
10 黑色土	ロームブロック (φ2cm以下) 少量、ローム粒多量	32 灰褐色粘土 土(粘土主張) 少量
11 黑色土	ローム粒微量	33 灰褐色粘土 土(粘土)、ローム粒少量
12 黑色土ブロック		34 灰褐色粘土 ロームブロック (φ1cm以下) 少量、焼土粒多量
13 黑色土	ローム粒少量	35 黑褐色土 ロームブロック (φ2cm以下) 多量、焼土粒ブロック (φ1cm以下) 少量 【カモド断面、住居内土坑 P5の覆土】
14 黑褐色土	ロームブロック (φ2cm以下) 少量、ローム粒少量	36 黑色土 ローム粒微量、硬い(破り方)
15 黑色土・土塊	ロームブロック (φ5cm以下)、炭化物少量	37 黑色土 ローム粒微量、硬い(破り方) 多量
16 黑褐色土		38 黑褐色土 ローム粒微量、硬い(破り方)
17 黑褐色土	ロームブロック (φ1cm以下) 少量	39 黑褐色土 ロームブロック (φ10cm以下) 多量、【割り方】 【割り方、住居内土坑 P5の覆土】
18 黑色土	炭化物少量	40 灰褐色粘土 土(粘土) 多量 [カモド断面]
19 黑色土	ローム粒、炭化物少量	41 黑褐色土 土(粘土) 多量 [カモド断面]
20 黑褐色土	ロームブロック (φ1cm以下) 少量、ローム粒多量、炭化物少量	42 黑色土 ローム粒ブロック (φ1cm) 少量、織りなし、【住居内土坑 内の覆土】
21 黑色土	ローム粒少量、織りなし	
22 黑色土	ロームブロック、焼土粒ブロック (φ5cm以下) 少量、炭化物少量、織りなし、【住居内土坑 P2の覆土】	

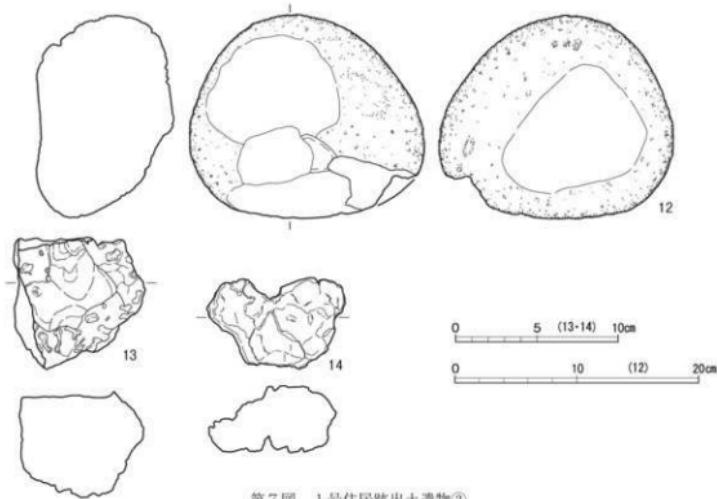
もつものである。長方形の浅い掘り込みは木製の蓋を設置した痕跡とも考えられる。柱穴・ビット 柱穴の痕跡は掘り方も含めて検出されなかった。住居南東部にあるP2は1.20×0.85mの長方形の土坑状を呈するもので、覆土には織りがなく、床面を壊して掘り込まれたものである。その覆土がカマドと共に灰褐色粘土ブロック・焼土ブロック・炭化物を多く含んでいること、出土した須恵器壺の破片(4)がカマド出土の破片と接合したことから考慮すると、P2は住居廃絶時のカマド廃棄に伴う土坑と考えられる。P2からは他に土器壺の破片が出土している。カマド 北西壁の中央に構築される。灰褐色粘土を主体に構築された両袖が窓内へ50cmほど張り出す。燃焼部は幅35cm、奥行80cmを測る。煙道部は下半は急角度で、上半は傾斜が緩くなって立ち上がる。煙道の窓外への張り出しが75cmほどである。煙道部は黒色土(Ⅲ層)を掘り抜き、その部分に袖と同じ灰褐色粘土を充填して構築している。燃焼部の中央に30×22cmの楕円形に強く焼けた火床面があり、深さ4cmにわたって焼土化していた。燃焼部には厚さ3cmほどの灰層が堆積し、その上を天井崩落土とみられる粘土が覆っていた。方位

N-31°-W。掘り方 床面から概ね15cmの深さまで掘り込まれ、ロームブロックと黒色土(Ⅲ層)の混土が充填されている。住居北半で浅く、南側がやや深くなる傾向にあるのは、地形の傾斜によるロームまでの深さの差が影響したと思われる。住居中央北寄りの掘り方中では、床面より約5cm低い位置で不整形な硬化面が検出された。硬化面は貼床状になっており、古い床面が存在し、床面の貼り替えが行われた可能性を示している。南東壁沿いの壁周溝にズレが生じているのは、この床面の貼り替え時の掘削に起因するものかもしれない。また土坑状の掘り込み(床下土坑)も多数検出された(P3~P12)。なかでも住居中央の床下土坑P3は整った円形(径約70cm)を呈し、覆土はカマドの焼土ブロック・炭化物・灰を廃棄したような状況であった。床面の貼り替えと同時にカマドの造り替えも行われたことが考えられる。他の床下土坑は遺物がほとんど出土せず、P3から多く土器片が出土したことでも、P3がカマドの造り替えに伴う廃棄土坑であったことを示している。またP5も焼土の付着した土器壺の破片や焼土ブロックを出土したことから、カマド造り替え時に掘削された可能性がある。P3・P5を除く床下土坑は、いずれも不整形な平面形で、覆土はロームブロックと黒色土の混土である。貼床などに利用するロームの採取を目的とした採掘坑と考えられる。遺物 まず炭化材と焼土の出土が挙げられる。炭化材は概ね住居東側の隅から住居中央に向かって倒れ込む方向性を示し、住居中央からみると放射状に広がる状況である。住居中央ではほぼ床面に近い位置にあるが、住居外側ほど高い位置で検出される。このような状態から、炭化材は垂木などの屋根材が焼け落ちたものと考えられ、東隅付近の壁際には焼失前にある程度の土が堆積していたことを示唆している。炭化材は最大径15cm、最大長80cmであった。ただし遺存状態が良くなく、取り上げの段階で形が崩れてしまっている(取上げ点数27点)。焼土は平面的には炭化材の出土範囲と重なり、断面では炭化材の直下・直上ともに検出され、最大厚は20cmである。黒色土主体の土が焼けたもので、ロームの小ブロックを

わずかに含んでいる。この土は、焼土が検出されなかった部分の同レベルに堆積している黒色土(断面の11-19層)と似ており、本来は同一の土であった可能性が高い。垂木材などと一緒に焼け落ちた黒色土は、住居の屋根構造が土葺屋根であった可能性を示すものである。炭化材の直上付近では焦げた台石(12)と製鍊滓(13)が出土しており、火災中ないし火災後に遺棄されたものである。台石(12)は火山起源の転石を利用したもので、部分的に平滑な使用面がある。一方、床面出土の土器が皆無であることは、カマドの廃棄とともに、意図的な火災であったことを示している。またカマド出土の土器部(7)の胴部片が、炭化材直上出土の底部と接合したことは、カマド廃棄時に壺の底部だけを取り出し、それを火災後に遺棄したことであり、意図しない火災では起こりにくい出土状況である。カマド内の須恵器(2)は、口縁部を打ち欠き、伏せた状態で出土しているが、支脚等に転用されたような被熱の痕跡はなく、カマド廃棄時に遺棄されたされたものと考えられる。出土した須恵器は全て新治産である。時期 覆土最上部出土の須恵器(1)が9世紀後半を示すが、他の出土遺物により9世紀前半から中期と判断される。



第6図 1号住居跡出土遺物①



第7図 1号住居跡出土遺物②

第2表 1号住居跡出土遺物観察表

回収番号	種別 器種	口径 器高 底径	特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	須恵器 环	(12.7) — —	体部下端手持ちヘラケズリ。	白色粘、雲母	還元 やや不良	灰色	覆土上層
2	須恵器 环	— — 6.3	体部下端手持ちヘラケズリ。底部一定方向ヘラケズリ。 見込みに「ハ」の字状压痕。口縁部打ち欠き。	白色粘、石英、雲母	還元 普通	灰色	カマド内
3	須恵器 甕	(33.0) — —	口縁部片。側部は楕円の平行タキ。内面ナデ。	白色粘、雲母	還元 普通	にぶい黄色～ 灰色	南東側壁圓溝内
4	須恵器 甕	— — —	胴下半部破片。外表面斜位の平行タキ、内面ナデ。	白色粘、石英、雲母	未還元 普通	橙色～灰オリー ブ色～暗灰黄色	カマド内とP2 5と同一個体
5	須恵器 甕	— — —	胴下半部破片。外表面斜位の平行タキ、内面ナデ。	白色粘、石英、雲母	未還元 普通	にぶい黄褐色	カマド内 4と同一個体
6	土陶器 甕	(19.8) — —	口縁部片。短く屈曲し端部を構み上げる。内外面ナデ。	チャート、石英、 施錆骨針、雲母	醸化 普通	褐色	カマド左端
7	土陶器 甕	— — 7.5	外表面側位ナデ、胴部下半横位ヘラケズリ。内面ナデ。 底部本茎痕。外表面底部周辺に灰褐色粘土付着。	チャート、石英、 雲母	醸化 良好	にぶい褐色～ にぶい黄褐色	側部片はカマド、 底部は住居南部の 炭化物層出土
8	須恵器 环	(12.4) — —	口縁部片。	白色粘、雲母	還元 やや軟質	にぶい黄色	床下土坑P3出土
9	須恵器 甕	(26.0) — —	口縁部片。	白色粘、雲母	還元 普通	暗灰黄色～灰色	住居北東部側り方
10	土陶器 甕	(17.6) — —	口縁部は外傾して両く。胴部外面ヘラケズリ、胴部内面 ヘラナデ。口縁部内面にコケ状物質付着。	石英、雲母	醸化 良好	にぶい赤褐色	床下土坑P3出土
11	土陶器 小型甕	(10.8)	口縁部は外傾して両く。胴部外面ヘラケズリ、胴部内面 ヘラナデ。口縁部内面にコケ状物質付着。	長石、雲母	醸化 普通	褐色～灰黃褐色 ～黒褐色	床下土坑P3出土
12	白石	長さ16.7cm、幅19.3cm、厚さ11.3cm、重さ248kg。全面が溶解し、気泡のある安山岩。一部に平滑面あり、部分的に煤付着。					住居東部の炭化材 出土層位中
13	製錬滓	長さ8.1cm、幅8.1cm、厚さ6.5cm、重さ464g。製錬滓の卯底部分、下部に土付着、着色なし。					住居中央部の炭化 材出土層位中
14	土製品	長さ7.8cm、幅5.6cm、厚さ4.1cm。一部に平坦面がある。					覆土中

第5章 調査成果

本調査では平安時代9世紀中頃の竪穴住居跡を1軒検出した（1号住居跡）。1号住居跡は調査地南東側に想定される谷部に面した南向き斜面に立地し、事前の試掘調査の様子からは、周辺に住居跡が点在する集落のあり方が窺われる。本遺跡北東約1kmにある小山市寺野東遺跡における8世紀初頭から9世紀後半までの住居跡が、台地平坦面より谷部両側の台地縁辺や斜面にまとまる傾向にあるとの同様の立地である。1号住居跡は、谷戸田を開発する小規模な農耕集落のあり方を示すものと言えよう。

本遺跡と同じく下総国結城郡に属した可能性のある小山市金山遺跡では、9世紀中葉になってそれまでの農耕集落から、鍛冶を主体とした鉄生産を集約的に行う手工業生産集落へと変化している。さらに小山市大境遺跡においても9世紀後半の製鍊滓が多く出土することから、同地域が手工業生産域として再編されたことが明らかとなっている。1号住居跡出土の製鍊滓は住居焼失後に遺棄されたもので、小山市の製鉄遺跡の操業時期と重なる。本遺跡付近に製鉄遺跡は確認されていないことから、石の代替品など何らかの転用目的で同地から持ち込まれた可能性も考えられる。ここでは結城郡で活発化した手工業生産の一端を示す遺物として評価しておきたい。

ところで、1号住居跡はカマド材の廃棄土坑の存在や出土遺物の少なさなどから、住居廃絶の際に故意に焼失させたものと考えられた。炭化材の出土範囲と重なるように焼土が出土している点が注目される。とくに住居中心から東隅へ放射状に広がる垂木材と推測される炭化材が焼土に覆われる様子は、1号住居跡の上屋構造が土屋根であったことを示唆している。それは住居中央の焼土の存在から、屋根の下部だけでなく屋頂部までの全面を覆う土屋根であったと推定される。屋根土の層厚は最大で20cmである。1号住居跡の位置する斜面は黒色土の堆積が厚く、ロームへの掘り込みがごく浅いことから、周堤や屋根土には黒色土が主体的に使われたと考えられる。炭化材や焼土がほとんど検出されていない住居北側では、南側の炭化材と同レベルに堆積している、炭化物粒とロームブロックを少量含みながら焼土化していない黒色土（覆土11・19層）が屋根土であったと考えられる。住居廃絶の経過としては、日常食器等の片付けとカマドの破却に伴って、カマド材の廃棄土坑とカマド内への須恵器の残置行為があり、その後に住居東隅付近に一定の黒色土の流入があった後に焼失に至る。焼失は住居の出入り口が想定される南側から酸素の供給を受けながら、南側からの燃焼が頂部に至り、その後は土屋根に伴う湿気と酸素不足による不完全燃焼によって鎮火、北側は焼けずに朽ち果てたと推定される。本遺跡の周辺では、9世紀前葉の小山市金山遺跡Ⅶ区SI-009が1号住居跡と同規模の焼失住居であり、ここでは横木を支える柱・横木・垂木、屋根材のヨシや茅類と思われる炭化物が確認された。炭化材が住居隅部から放射状に倒れ込む状況が1号住居跡と共通しているが、焼土がほとんど検出されておらず、土屋根の痕跡は明らかでない。垂木材の間隔は1号住居跡と同程度であるが、材の径は6~8cmとされ、1号住居跡の垂木材よりも細いものである。両住居跡の相違は同じ下総国結城郡内における竪穴住居の焼失事例として、上屋構造の多様性を示すものといえる。1号住居跡は、屋根土が黒色土である場合について土屋根かどうかの判断の難しさを示す一方で、焼失を手掛かりに竪穴住居の上屋構造の一つとしての土屋根を明らかにできる貴重な成果となった。

参考文献

- (財) 桜木県文化振興事業団ほか 1996 「寺野東遺跡Ⅶ(歴史時代編)」・「金山遺跡Ⅳ」
 桜木県教育委員会 1993 「大境遺跡」



調査区全景（空撮、北西から）



調査区全景（空撮、南東から）



1号住居跡全景（南東から）



1号住居跡カマド・貯蔵穴（東から）



1号住居跡カマド全景（南東から）



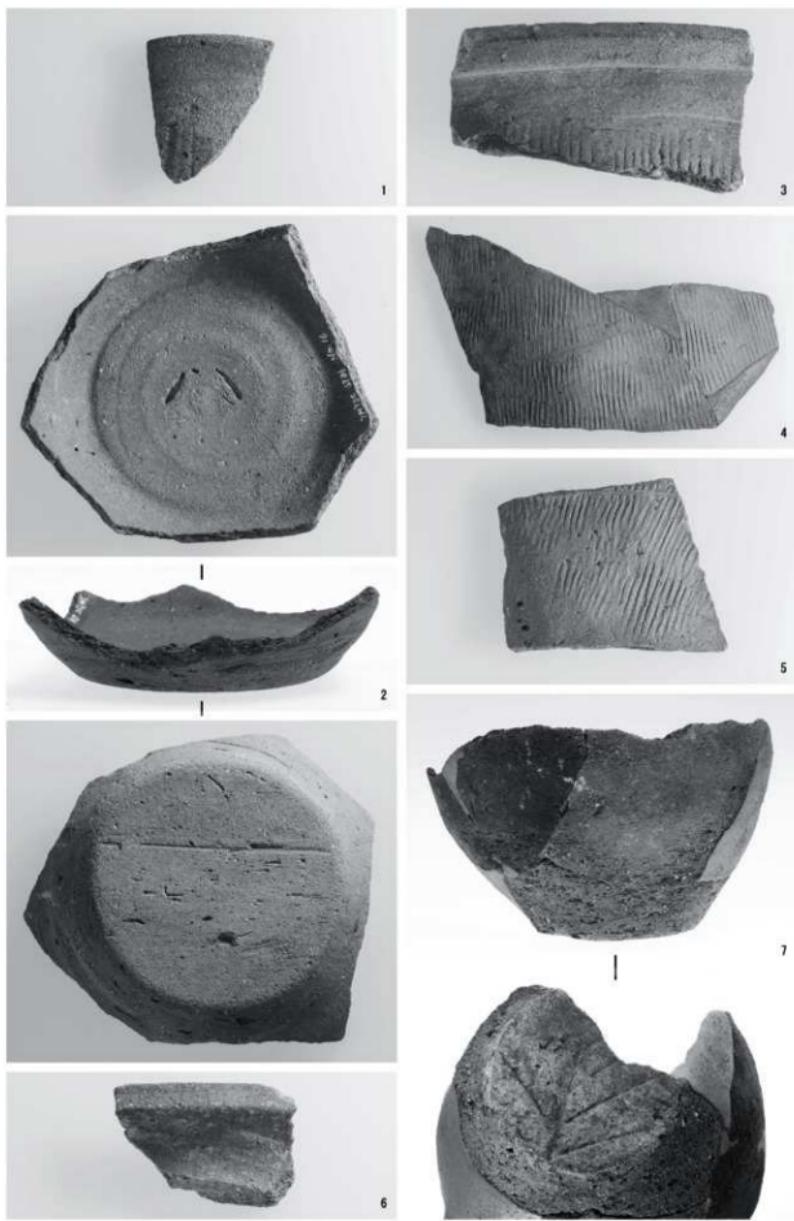
1号住居跡カマド遺物出土状況（東から）



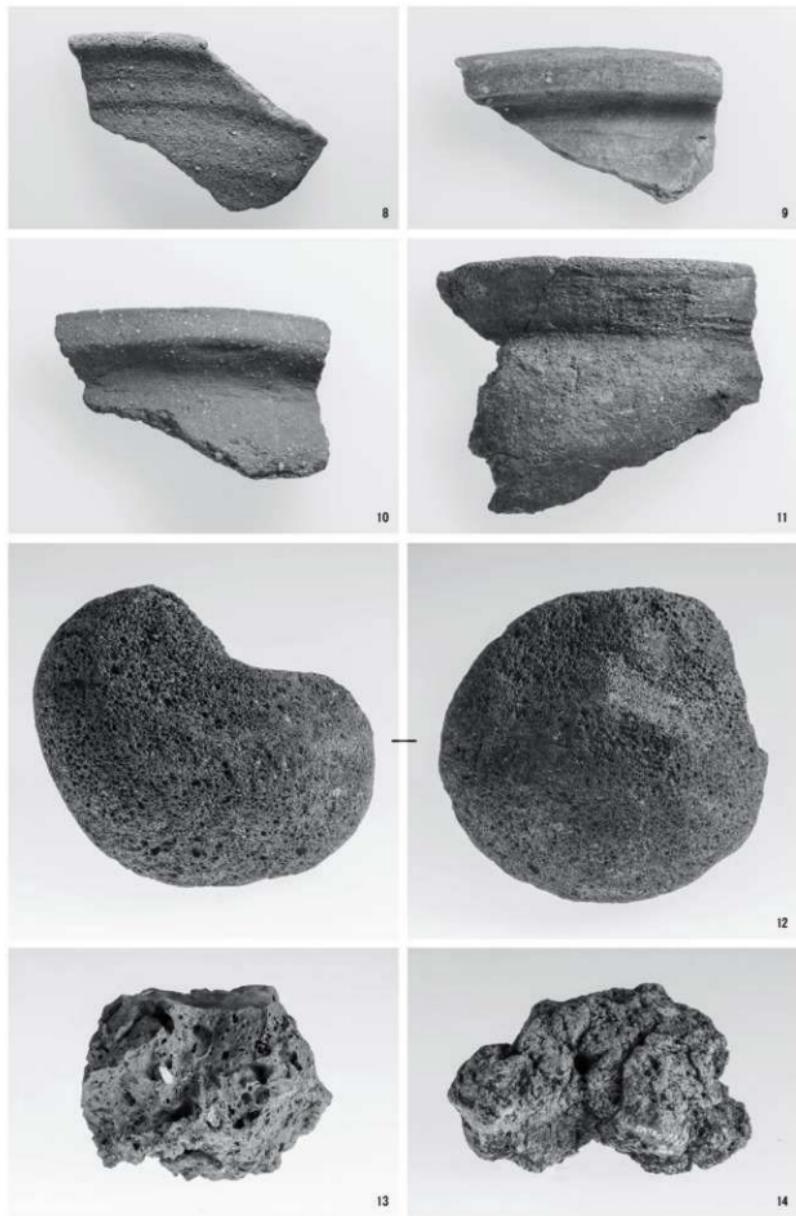
1号住居跡カマド断ち割り（南東から）



1号住居跡掘り方（東から）



1号住居跡出土遺物（1）



1号住居跡出土遺物（2）

抄 錄

フリガナ	ヤナギタシーアセキ							
書名	柳下C遺跡							
副書名	宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査							
巻次								
シリーズ名	結城市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第10集							
編著者名	齊藤達也 常深尚							
編集機関	有限会社毛野考古学研究所茨城支所							
編集機関所在地	〒303-0044 茨城県常総市菅生2042番地1							
発行機関	結城市教育委員会							
発行機関所在地	〒307-8502 茨城県結城市大字結城7473 結城市役所駅前分庁舎（しるくろーど3階）							
発行年月日	西暦2016年12月27日							
ふりがな 所取遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	°	°			
柳下C遺跡	茨城県結城市 大字結城字柳下	08207	027	36° 19' 00"	139° 52' 28"	20160704 ~ 20160708	100 m ²	宅地造成
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
柳下C遺跡	集落跡	平安時代	整穴住居跡1軒	土師器、須恵器、台石、製鍊滓		平安時代の焼失住居を検出。		

結城市文化財調査報告書第10集

柳下 C 遺跡

2016年12月26日印刷

2016年12月27日発行

編集／有限会社毛野考古学研究所茨城支所

〒303-0044 茨城県常総市菅生2042番地1 電話 0297(27)0722

発行／結城市教育委員会

〒307-8502 茨城県結城市大字結城7473 電話 0296(32)1111

印刷／中村印刷工業株式会社

〒303-0039 富山県富山市東町2丁目3-22 電話 076-424-4616

